

～世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」～

藤岡から世界へ！高山社跡

たかやましやあと



群馬県藤岡市

交通・東国文化の要の地 藤岡市

藤岡市は群馬県南西部に位置し、関越自動車道、上信越自動車道など高速交通網の結節点となっており、埼玉県に接する面積180.09km²の自然豊かな美しい景観と清流に恵まれた地です。市域には鮎川・かぶらがわ からすがわ かながわ 鐺川・烏川・神流川が流れ、神流川には東京の水がめの一つ、下久保ダム（水資源機構管理）があります。

藤岡市は群馬県内でも有数の古墳密集地域であり、現在でも400基を超える古墳が残されています。中でも白石稲荷山古墳、七輿山古墳など大型前方後円墳があります。日本書紀には安閑天皇二年（535）にしろしいなりやま ななごしやま 緑野屯倉設置の記述があります。また、正倉院御物には緑野郡小野郷から献納された調布が残されており、古代から藤岡地域は中央政権とのつながりの強さがかがえます。一方、おにし 鬼石地区にあるじょうほうじ 浄法寺はかつて緑野寺として、道忠教団の仏教の東国布教の拠点となり、818年には最澄がこの地で大法要を行いました。

中世では平井城跡があり、永享10年（1438）または応仁元年（1467）に山内上杉氏が築城し、天文21年（1552）の後北条氏の平井城攻めで落城するまでの間、関東管領山内上杉氏の居城としての役割を果たしていました。

このように藤岡は歴史文化で各時代を通じて東国の要の地となっていました。そして、江戸時代には絹取引の地として栄えます。

栄華を極めた絹取引

藤岡市の歴史の中で江戸時代後半は、絹の取引で最も栄華を極めた時期です。当時幕府の直轄地域であった藤岡町は、笛木町通りと動堂通りの二つの通りの交

差する商業の町で、西上州の絹取引が盛んに行われていました。中でも「日野絹」という高品質の絹が取引されており、三井越後屋が藤岡町に出店し、多くの利益を上げ、その恩恵を諏訪神社の神輿、灯籠の奉納として表しています。現在も残る諏訪神社の2基神輿の荘厳さは当時の藤岡町の栄華を物語っています。



諏訪神社の宮神輿

近代養蚕法の父 高山長五郎



高山長五郎 肖像写真

このような背景の中、文政13年（1830）高山長五郎が生誕します。高山家は中世から続く名家で、代々名主を勤める家でした。長五郎は戸長を歴任後、養蚕に本格的に取り組み、明治6年「養蚕改良高山組」を立ち上げました。養蚕法について試行

錯誤の末、明治16年頃、従来の通風に重きを置く「清涼育」、火鉢などの温効果に重きを置く「温暖育」のそれぞれの長所を吸収し、自らの到達点であるあらゆる気候地域・環境に適応できる養蚕飼育法、



私立甲種高山社蚕業学校

「清温育^{せいおんいく}」を確立したといわれます。明治17年に養蚕改良高山組を改め「養蚕改良高山社」を設立し、養蚕法の普及・伝習を行い、広く安定的な養蚕業の経営を広めました。高山長五郎は「国利民福」を信条に、教を請う人々に分け隔てのない養蚕技術の普及とそれによる豊かさの享受を図り、優秀な学生は授業員として各地に派遣され、技術の普及が行われました。しかし、明治19年(1886)若くして亡くなりました。

その意志を継いだ町田菊次郎は、明治20年藤岡町へ事務所・伝習所を移転し、明治34年に私立甲種高山社蚕業学校を設立しました。信条に「救世済民」を掲げ、高山長五郎の意志とともに養蚕技術者の養成と養蚕技術の普及に努め、学生は全国・アジア圏まで広がり、標準養蚕法「清温育」と言われるまでになりました。これらの功績が、高山社の優秀な養蚕家の輩出と富岡製糸場への良質な繭^{まゆ}の安定供給を支え、日本の近代絹産業の礎となったことは言うまでもありません。



高山家長屋門



母屋兼蚕室 (高山社跡 外観)



2階蚕室

■往時を偲ぶ高山社跡

現在残る世界遺産「高山社跡」は高山長五郎の生家であり、明治24年に「清温育」の理想の蚕室として母屋を増築したものです。

2階に残る蚕室は当時の状態を残していて、天窓のある天井はすのこ状になっており、向かいあう窓が開放できるように換気に対する構造を残しています。床には1階の囲炉裏からの吹き抜けのほか、2階床には2つの養蚕火鉢が配置でき、建具、床は開閉可能な構造で作られており、換気と温度調節へのこだわりが随所にみられます。是非、この建築的構造に注目して見学していただきたいと思います。

■世界遺産登録へ

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、平成26年6月21日にドーハでの第38回ユネスコ世界遺産会議において世界遺産登録決議がなされ、同月25日に正式登録決定を受け、国内14番目の世界文化遺産となりました。群馬県の養蚕製糸が日本の近代化に大きく貢献したことが世界で評価されました。

構成資産である「高山社跡」は、観光という観点では物足りなさを感じる方がいるかもしれませんが、養蚕教育機関という業績を知る新たな世界遺産の見方が生まれることを期待しています。是非、訪れてガイドの解説などに耳を傾けていただければと思います。